

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
平成29年度研究開発実施報告書

「人と情報のエコシステム」研究開発領域
「『内省と対話によって変容し続ける自己』に関する
ヘルスケアからの提案」

研究代表者氏名 尾藤誠司
(国立病院機構東京医療センター
臨床疫学研究室長)

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2 - 1. 研究開発目標	2
2 - 2. 実施内容・結果	2
2 - 3. 会議等の活動	11
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	12
4. 研究開発実施体制	12
5. 研究開発実施者	14
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	16
6 - 1. シンポジウム等	16
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	17
6 - 3. 論文発表	18
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	19
6 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等	19
6 - 6. 知財出願	19

1. 研究開発プロジェクト名

『内省と対話によって変容し続ける自己』に関するヘルスケアからの提案

2. 研究開発実施の具体的内容

2 - 1. 研究開発目標

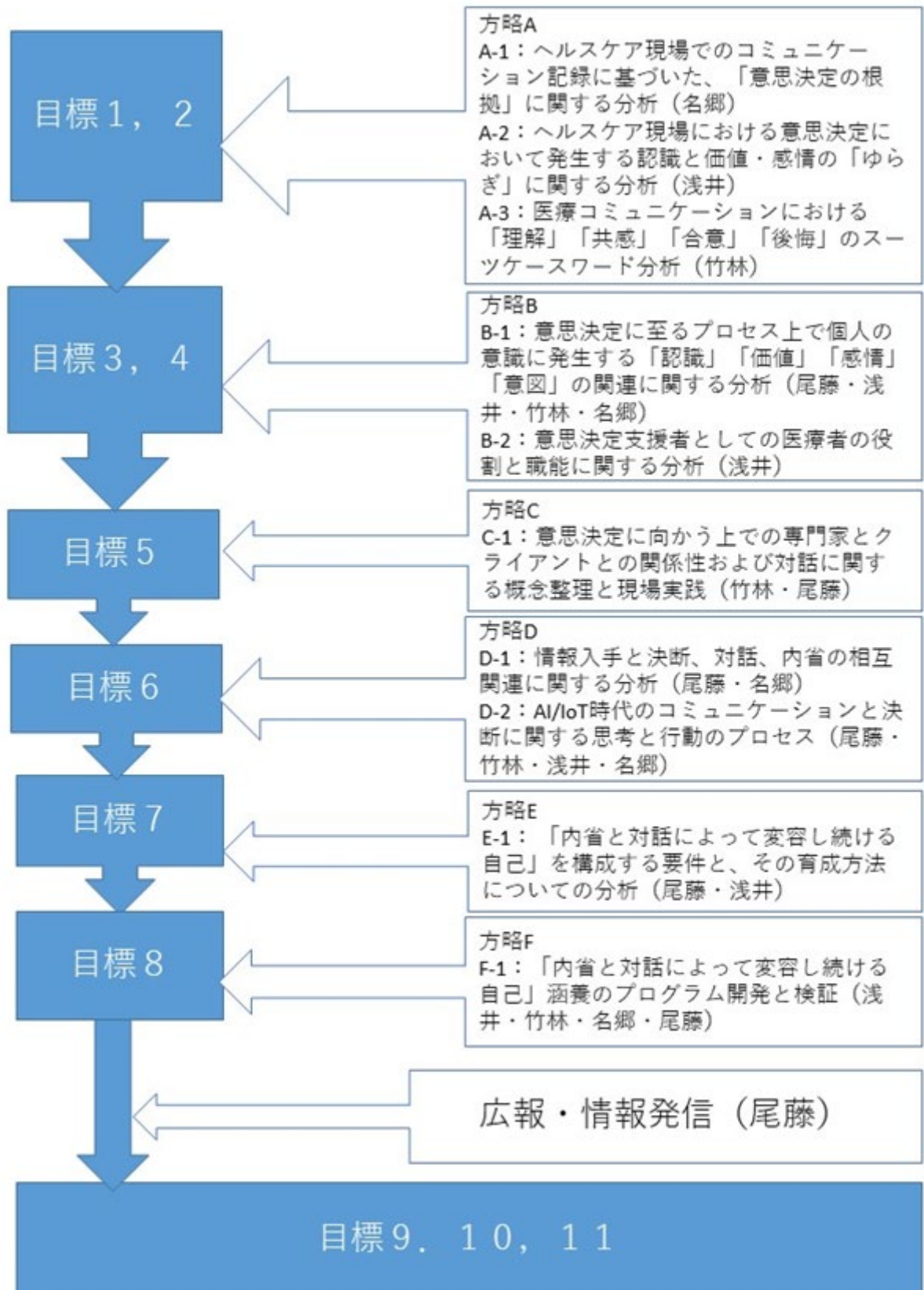
プロジェクト全体の目標：「人間と情報とのなじみがよい社会」を想定したときに、人間個人が情報に対してしなやかに付き合う上での心のありかたを明らかにする。特に、個人が自らの不安感情にどのように向き合い、自己変容につなげていくかについての具体的な提案を行う。

平成29年度の目標：「内省と対話によって変容し続ける自己」のモデルを提案する。その上で、以下のことを行う。

- ・ 質的研究「医療現場での意思決定が行われるうえで生じる、関係者間および自己の内的コンフリクトに関する理論記述分析」を開始し、インタビュー調査を終え、理論飽和まで持ち込む（方略 A-1、A-2）。
- ・ さらに、理論のトライアングレーションのために、診療記録にアクセスしたデータ分析を行う。
- ・ 「情報に外挿される意図と外在価値が個人の認識や価値づけに影響していく仕組み」についての論考を完了する。
- ・ 「内省と対話によって変容する自己」に関するスツワード分析を完了する（方略 A-3）。
- ・ 人工知能が身近にある時代の専門家の役割に関するソクラティック・ダイアログ分析を開始する（方略 B-2）。

2 - 2. 実施内容・結果

(1) スケジュール



実施項目	平成28年度 (H28.11～ H29.3)	平成29年度 (H29.4～ H30.3)	平成30年度 (H30.4～ H31.3)	平成31年度 (H31.4～ H31.10)
タスクグループの確定	←→			
事業A-1	←→	→		
事業A-2	←→	→		
事業A-3	←→	→	→	
事業B-1		←→	→	
事業B-2		←→	→	
事業C-1			←→	→
事業D-1			←→	→
事業D-2			←→	
事業E-1			←→	
事業F-1				←→
広報・情報発信・HPフォーラム上の継続議論	←→			→

(2) 各実施内容

- ・ 当プロジェクトの到達目標としての開発物は主に2つ考えている。主たるものは、1. 新たな情報社会において自己を見失わずに生きる上での「セルフケア」のコンセプトと、それを支援するための方法、である。もう一つは、新たな情報社会における専門家の役割を職責に関する提言である。この二つを「ヘルスケア」という各論的な視座から提案することである。
- ・ 平成29年度の到達点
 - ・ 達成目標1および2を達成させる。
 - ・ 達成目標3の達成見通しをつける。
- ・ その上で、具体的には以下について達成する。

- ・ 質的研究「医療現場での意思決定が行われるうえで生じる、関係者間および自己の内的コンフリクトに関する理論記述分析」を開始し、インタビュー調査を終え、理論飽和まで持ち込む（方略 A-1、A-2）。
 - ・ 「内省と対話によって変容する自己」に関するスツワード分析を行う（方略 A-3）。
 - ・ 人工知能が身近にある時代の専門家の役割に関するソクラティック・ダイアログ分析を開始する（方略 B-2）。
- 平成 29 年度の実施項目
以下の項目を実施する
- ・ 分担グループによるプロジェクトの遂行

実施項目 I（対象 A-1、A-2、B-1、C-1）：「医療現場での意思決定が行われるうえで生じる、関係者間および自己の内的コンフリクトに関する理論記述分析」の実施

- ・ 調査の方法
 - ・ 治療に関連する「意思決定」の場面において、内的葛藤や他者（医療者・家族など）とのコンフリクトを経験した方へのインタビュー調査をおこなった。
 - ・ 約 80 分/回のインタビュー。現時点で 12 名のヘルスケア現場における重要な決断を行った方に対する「コンフリクト体験」のインタビューを行い、インタビューデータを基に分析を行った。
- ・ テーマ別分析
 - ・ 「コンフリクト体験」を通じた、「内省と対話によって変容し続ける自己」のセオリー構築に寄与するための分析を行った。本研究においては、個々の事例に対してナラティブ分析の手法を用いた。個別の事例分析結果を横断的に比較統合し、モデル化を行った。
 - ・ 同テキストを用いて、「診察室」あるいは「病室」という「場」、さらには、当事者と医療者との関係性の中で個人の事実認識等が変容するプロセスに関する分析を行った。本分析は改変型グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて行った。

実施項目 I I（対象 A-1、A-2、B-1、C-1）：「人工知能が実装された医療現場を想定した上での医療情報の利用、および医療に関する決断についてのグループ調査」

- ・ 「コンフリクト体験」に関する実証調査とは別に、近未来シナリオを通じて、人工知能が実装された時代における医療情報のあり方、医療情報の利用の仕方、健康リスクを知った際の感情との向き合い方についてのグループ調査を行った。その上で、得られた調査の分析を通じて、不確実性を持つ健康リスク情報や診療等に関する選択肢に対して、人がどう考え向き合うのかについての理論化を行った。当該研究に関する倫理委員会への提出は平成29年度に行った。

実施項目 III(対象 A-3)：決断における「自己」「自己変容」「思考」、医療コミュニケー

ションにおける「理解」「共感」「合意」「後悔」のスーツケースワード分析

- ・ 2週間に一度、ミンスキー「脳の探検」「心の社会」などを参考文献としながら、「理解」「共感」「合意」「後悔」などに関するスーツケースワードの解明に関する会合を行った。基盤となる理論として「マルチモーダルな自己」のモデルを参照した。会合への参加者は、毎回特定のテーマとなる概念に関してそのモデル化の提案となる宿題が提出され、会合時に宿題を持ち寄りながらモデル化を進めた。

実施項目 IV (対象 B-2)：意思決定支援者としての医療者の役割と職能に関する分析

- ・ AI/IoT など次世代情報技術が発達した状況において、意思決定支援者としての医療専門職の役割及び職能がどのようなものに変化するののかについて考察を行うことを目的に、「ネオ・ソクラティック・ダイアログ (NSD) /トランスファー・ダイアログ (TD)」という手法を用いた理論生成を行った。ソクラティック・ダイアログには、多職種からなる医療関係者とともに、哲学の背景を持つ者、患者の立場の背景を持つ者で構成された6名が参加し、丸二日かけて実施した。NSDで議論される主要テーマは「(患者の)意思決定において(際して)、医療のプロ(医師)は何をしているのか」とした。また、TDにおいては「人工知能が実装された社会において、(患者の)意思決定において(際して)、医療のプロ(医師)は何をしているのか」について議論し理論化を行った。

平成 29 年度当初からの変更点

- ・ 当初 A-1, A-2, B-1, C-1 の実証調査を分断して行う予定であったが、一部は統合、一部は再分断し、事業H29 実施項目 I「コンフリクト体験に関する実証分析」と、事業H29 実施項目 II「人工知能時代の医療と決断に関する分析」の2事業とした。理由としては、調査対象及び調査の方法という視点から事業をまとめ直したためである。これによって、より効率的に事業を進めることが実現できている。

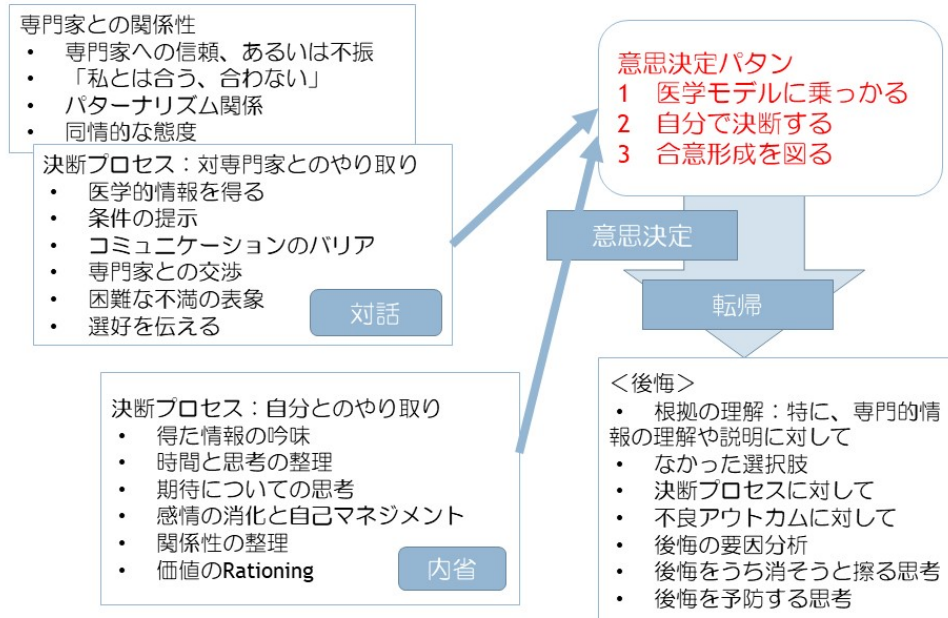
(3) 成果

実施項目 I：「医療現場での意思決定が行われるうえで生じる、関係者間および自己の内的コンフリクトに関する理論記述分析」

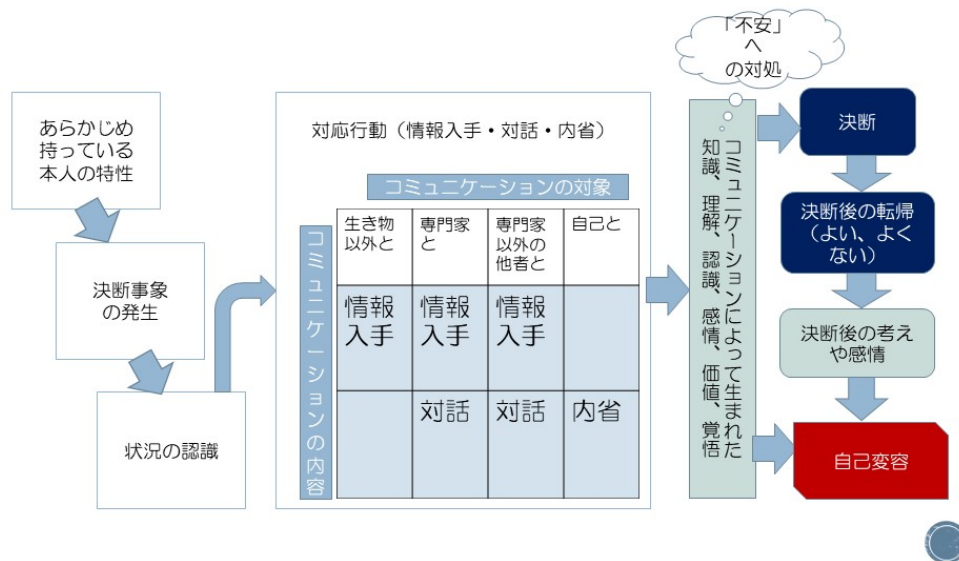
成果：

- ・ 疾病体験を通じて、検査や手術などに関する決断に至るまでの心的プロセスと、情報の入手や情報吟味、意思決定に与える影響印紙などについてのモデルを提案した(下図参照)。
- ・ その上で、自己変容が訪れる際に発生する不安感情の位置づけ、さらには、対話と共感との関係、当事者と専門家との関係性の変容と自己変容との関係などについて言語化が可能となった(下図参照)。

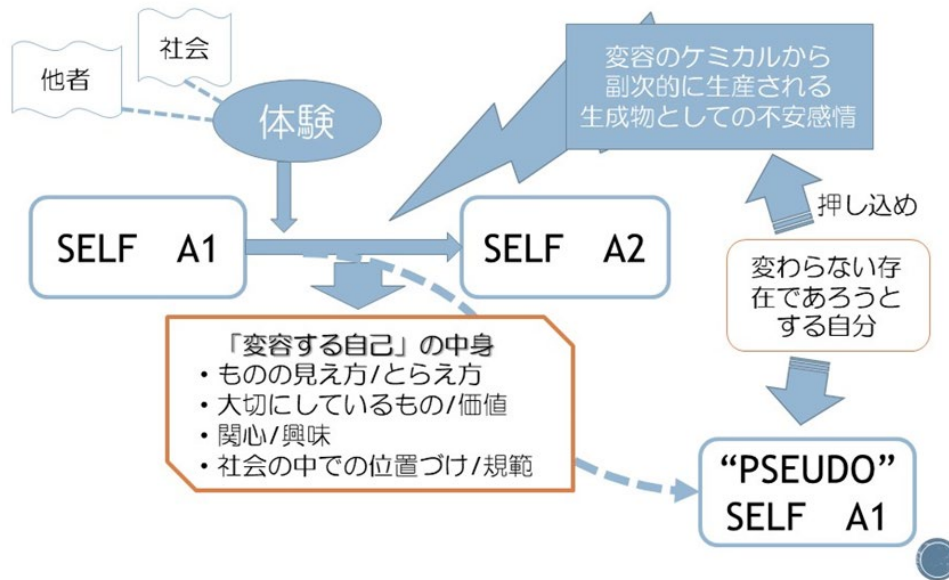
意思決定プロセスと後悔との関連



医療における重要な意思決定を行う上での、当事者の心的プロセス



不安と自己変容



実施項目 I I : 「人工知能が実装された医療現場を想定した上での医療情報の利用、および医療に関する決断についてのグループ調査」

成果 :

- ・ 平成 30 年 3 月に倫理委員会の承認を受け、同月に調査を実施した。
- ・ 現在インタビュー内容をテキスト化し、内容分析を行っている。

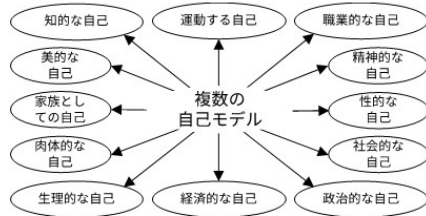
実施項目 III : 決断における「自己」「自己変容」「思考」、医療コミュニケーションにおける「理解」「共感」「合意」「後悔」のキーワード分析

成果 :

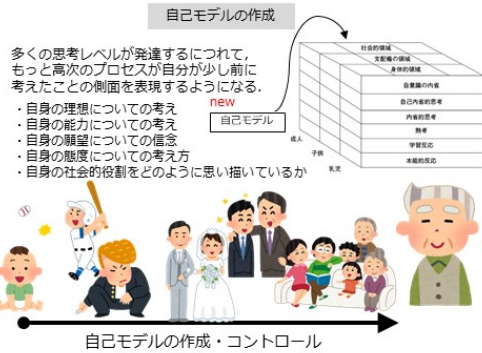
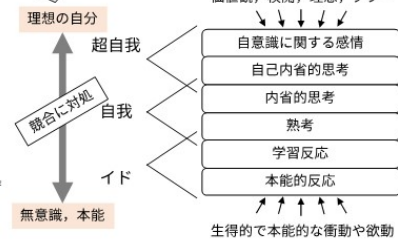
- ・ 複数のモデルを検討し、「内省と対話によって変容し続ける自己」の部分部分に関するモデルが明らかになった。
- ・ 特に、疾病体験に関連した自己の中から喪失したものと、それらに対する認識が自己変容に影響するモデル、さらには、対話を通じた自己変容が多重なレイヤーにおいて行われていることなどについて明らかとなってきた (下図参照)。

複雑な自己の喪失感

私たちは異なる能力、価値観、社会的役割に応じて異なるモデルをもち、複数のモデルを状況や目的ごとに切り替えている。



多くは抑制のために働く
 ・自分らしくありたい
 ・あの人からどう思われるだろう？

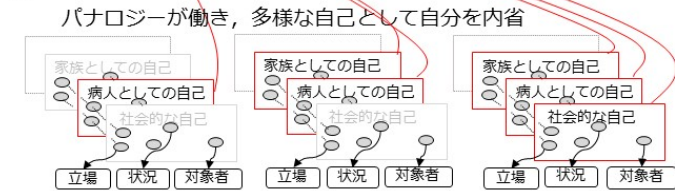
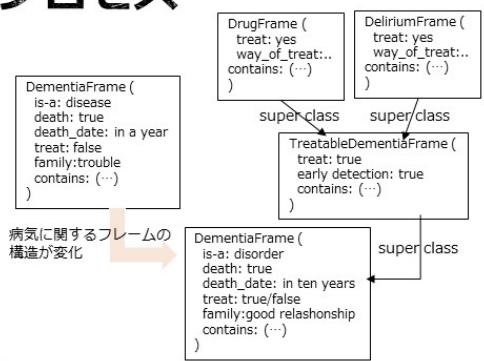
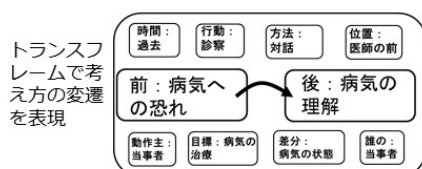


記憶や判断などの認知機能や身体機能が低下してくると、これまでできていたことができなくなる。高次のプロセス（価値観、理想、タブーなど）との統合に対処できなくなり苦痛に陥る

- ・友人のお荷物になることの恥ずかしさ
- ・異性と思われることの悔しさ差し迫る死への戦慄と恐怖
- ・動けなくなることへの苦悶
- ・障害が残り自由が利かないことへのおのけ



多重自己の表現と変容プロセス



slotの数やslotのvalue, そしてframeの深さが変化していく

実施項目 IV (対象 B-2) : 意思決定支援者としての医療者の役割と職能に関する分析

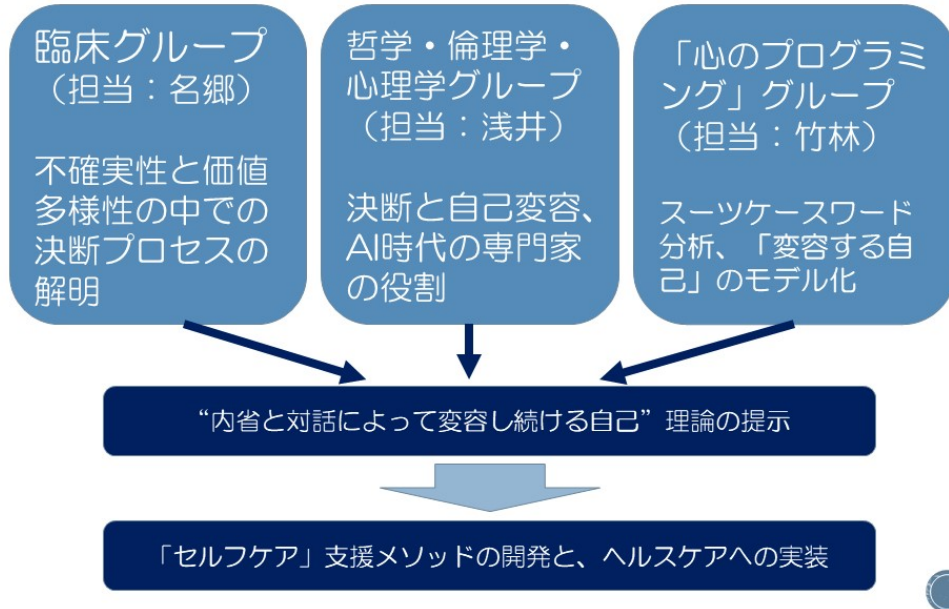
成果 : NSDおよびTDによって、以下の概念が浮き彫りになった。

- ・ NSDの問い「患者の意思決定支援において医療者がしていることは何か」
 - ・ 対話を通じて患者の関心事に共感し意味付けしている。
 - ・ 患者の気がかりについて共に取り組む相手方になり、それを患者に対して示す。
 - ・ 医療の知識経験を参照した上で共有された気がかりに対して、患者の意思決定にとって必要なことを洗い出す。
- ・ TDの問い「人工知能導入後における、医療者のあり方とは何か」
 - ・ 対象者の心の揺れにつきあう。「ああだ・こうだ」といっしょに話し合ってくれる人間
 - ・ ケアに「適当さ」を残す者
 - ・ 人工知能導入後における、医療者とは、医療あるいは健康に関する専門的性文脈（関心・認識・価値）をもつダイナミックな存在として当事者とそれらをすりあわせながら、ともに考え対話するコミュニケーション端末

(4) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

- ・ プロジェクト進捗状況
 - ・ 全体：全体的には当初の予定通りに進捗している。特に実証データからの分析に関しては、多彩なデータを収集することができ、理論化のめどがついてきている。
 - ・ 当初の予定より遅れている点とその理由：発信する情報がまだ経過途中であるため、ホームページなどを通じての情報発信に関してはまだ行っていない。
- ・ わかってきていること
 - ・ 「内省と対話によって変容し続ける自己」のモデル化が、次世代の情報社会における個人のこころの「手入れ」、さらには、他者とのやりとりに関する寛容につながる何らかのメソッドを提案できるめどがついてきている。
 - ・ キーワードとして「不安感情」が重要な分析対象となっている。特に、情報社会において「知ること」と「不安」との関係について着目しながら事業を進めていきたい。特に、人が不安を持ったとき、たびたび「不安を押し込める」方向に心が働くが、そうではなく「不安を手なずける/乗り越やす」ことに心を働かせることに着目していく。
- ・ 次年度に向けた課題
 - ・ 平成30年度以降は、「不安を手なずける/乗り越やす」ための可能な限り具体的なメソッドを開発し、可能であればそれを実践普及する手法にまで着手したい。現時点ではその方法を「セルフケア」と呼んでいる。また、自分自身の「セルフケア」を他者として支援するための「セルフケア支援」についてもメソッド化を図りたい。
 - ・ その上で、現在行っている分担グループの成果を統合させていくことを平成30年度は実現する（下図参照）。

プロジェクト分担



2 - 3. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2017/7/28 29. 30	内的コンフリクトに関する個別インタビュー	都内会議室及び対象者自宅	5名
2017/10/17. 22. . 23. 28. 11/11	内的コンフリクトに関する個別インタビュー	都内会議室	9名
2017/12/22	内的コンフリクトインタビュー分析者会議	東京医療センター臨床疫学研究室	飯岡 菊地 林 尾藤
2018/1/8	内的コンフリクトインタビュー分析者会議	東京医療センター臨床疫学研究室	名郷 飯岡 尾藤
2018/1/13. 14	将来の専門家の職能に関する Non-Socratic Dialogue (NSD)およびNSD後の対話（トランスファー・ダイアローグ (Transfer	大阪	中岡 尾藤 浅井 大北 堀江

	Dialogue))		
2018/1/21	人工知能AI (Artificial Intelligence) の医療応用を見 据えた医療の専 門性に関する公 開シンポジウム	仙台	浅井 尾藤
2018/3/25. 31	人工知能が実装 された医療現場 についてのグル ープ調査	都内会議室	4名/グループ 4グループ実施

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

- ・ 研究開発成果の試行的利用： 実際に「セルフケア」と「セルフケア支援」をイメージした際の支援形態のシミュレーションは開始し始めている。実際の臨床応用には至っていない。
- ・ 社会実験の取り組み：
 - ・ 日経メディカルオンラインブログ「尾藤誠司のヒポクラテスによるしく」において、医療における患者－医療者関係の変化、医療情報のとらえ方の変化などを踏まえながらメッセージを表現している。月1回程度の更新
<http://medical.nikkeibp.co.jp/inc/all/blog/bitoseji/>
 - ・ Notesブログにおいて、主にヘルスケア社会をモチーフにししながら、情報と人、内省、対話、共感などをテーマにした情報発信を行っている。
<https://note.mu/bitoseji>

4. 研究開発実施体制

4-1. 総括研究グループ

(1) 実施項目

- ・ オープンフォーラム上でディスカッションを行う。
- ・ 各研究課題の進捗成果を統合し閲覧可能にする。
- ・ 哲学や心理の専門家、統計処理の専門家などの参入を促す。

(2) プロジェクトにおける本グループの位置づけ

- ・ 本グループはプロジェクト全体の統括を行う。

- ・ また、3つのサブグループ活動に関する進捗管理と相互情報交通を支援する。

4-2. 臨床グループ

(1) 実施項目

ヘルスケア現場における意思決定と患者—医療者間のコミュニケーションに関する実証的な根拠を提示するとともに、個人の中で起こる「認識・価値・感情・意図」の連鎖、不安感情の発生と変化、および「内省と対話によって変容し続ける自己」について、ヘルスケアの文脈からの検討を行い、概念の提示に参加する。

(2) プロジェクトにおける本グループの位置づけ

- ・ 本グループは現在ヘルスケア現場で起きている、「情報と人間とのあいだになじみが悪い」状況について具体的に描き出すことを特に期待する。
- ・ また、特に不確実性の高い多面的な情報を人間が得た時に、それをどのように自己の決断にいかすかについての具体的な思考モデル、行動モデルを提示する。実証面における本プロジェクトの中心となるグループである。
- ・ 臨床における複雑な要素を加味したうえでの決断について、ベイズ統計理論を用いて説明する。

4-3. 哲学・倫理学・心理学グループ

(1) 実施項目

本グループでは、哲学的・倫理的および心理学的見地から、実証データも踏まえたうえで以下についての提案を行う。

- ・ 我々を取り囲む特定の価値観を内在させた情報には、どのようなものがあるのか、その主たる情報発信源は何かについて明らかにする。
- ・ 個人の価値観や人格がいかにか構成されているのか（成育環境、遺伝、生来的なパーソナリティ、両親による良心の形成、人生経験など）を可能な限り明らかにする。
- ・ 特定の規範を内在させた外的情報に接して自らの内に価値に関する葛藤が生じた場合、個人の中で何が生じ、どのような行動を取るのかを探索する。内的価値観の安定性や揺らぎについても検討する。
- ・ AI/IoT など次世代情報技術が発達した状況における専門家の新たな役割と機能について検討する。
- ・ 「内省と対話によって変容し続ける自己」を構成する要件と、その育成方法について検討し、その人間的特性を強化するための支援プログラムを開発する。

(2) プロジェクトにおける本グループの位置づけ

- ・ 本グループでは、特に「自己」が「自己」として成立するうえでの要件や、「自己」が継続定期変容を繰り返していくうえでのダイナミズムを哲学的な視点、心理学的な視点からモデル化していく。本プロジェクトにおいては、概念整理を行う上での中心となるグループである。

4-4. 「こころのプログラミング」グループ

(1) 実施項目

- ・ ヘルスケア現場において、患者と患者を取り巻く専門家等とのコミュニケーションの中

- で生じる「理解」「共感」「合意」「後悔」を構成する要素について解析を行う。
- ・ 情報を受け取ったり、他者と対話をしたりするときに自己の内部で発生する「認識」「価値」「感情」「意図」と、その変化について解析を行う。
 - ・ その上で、AI/IoT など次世代情報技術が発達した状況において、専門家とクライアントがそれぞれどのような役割を持ちながらコミュニケーションを行うべきかについての概念的な提示を行う。
 - ・ 「内省と対話によって変容し続ける自己」を涵養する上で、個人がどのように情報と接し続けていくべきかについて、意識と行動の関連性を明示化し、涵養プログラムに外挿する。

(2) プロジェクトにおける本グループの位置づけ

- ・ 本グループは、人が情報を取り入れたり、他者と対話をしたりすることによって、自己にどのような変容が生まれ、その変容が繰り返されていくのかについて、プログラミングの視点から解明することを役割とする。さらに、そこから生まれた成果を実際の人の思考の在り方や行動の仕方に外挿することを役割とする。

5. 研究開発実施者

マネジメント体制

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
尾藤誠司	ビトウセイジ	独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター	臨床研究センター 政策医療企画 研究部 臨床疫学研究室	室長
佐久間結子	サクマユキコ	独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター	臨床研究センター 政策医療企画 研究部 臨床疫学研究室	研究員
林八千恵	ハヤシヤチエ	独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター	臨床研究センター 政策医療企画 研究部 臨床疫学研究室	室員

グループごとの概要

研究グループ名: 総括研究グループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
尾藤誠司	ビトウセイジ	独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター	臨床研究センター 政策医療企画 研究部 臨床疫学研究室	室長
松村真司	マツムラシンジ	独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター	臨床研究センター 政策医療企画 研究部 臨床疫学研究室	研究員
佐久間結子	サクマユクコ	独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター	臨床研究センター 政策医療企画 研究部 臨床疫学研究室	研究員
林八千恵	ハヤシヤチエ	独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター	臨床研究センター 政策医療企画 研究部 臨床疫学研究室	室員

研究グループ名: 臨床グループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
名郷直樹	ナゴウナオキ	独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター	臨床研究センター 政策医療企画研究 部 臨床疫学研究室	室員
藤沼康樹	フジノマサキ	千葉大学大学院 看護学研究科	看護学部	特任 講師

研究グループ名: 哲学・倫理学・心理学グループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
浅井篤	アサイツツ	東北大学大学院	医学系研究科医療 倫理学分野	教授
大北全俊	オホキタマサトシ	東北大学大学院	医学系研究科医療 倫理学分野	助教

研究グループ名:「こころのプログラミング」グループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
竹林洋一	タケハヤシヨウイチ	静岡大学	創造科学技術大学院	特任教授
石川翔吾	イシカワショウゴ	静岡大学	大学院総合科学技術研究科	助教

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2018年 1月21日	人工知能 AI(Artificial Intelligence)の医療応用を見据えた医療の専門性に関する公開シンポジウム	東北大学医学系研究科 医療倫理学分野・セミナー室	20名	AI導入後の医療専門職が意思決定に発揮する専門性について議論された。AI導入後には「意思決定すること、患者・その家族の不安解消」が役割となる、「医療専門職は、医療あるいは健康に関する専門的文脈をもつダイナミックな存在として当事者とそれらをすりあわせながら、ともに考え対話するコミュニケーション端末となる」、「プロフェッション（公のことにするという約束を守る）であり続ける信頼できるシステムを構築する必要がある」との見解が提示された。
2017年 11月25日	コモンセンス知識と情動研究会第9回研究会（人工知能学会合同研究会2017）	慶應義塾大学 谷上キャンパス	約40名	人工知能学会の合同研究会で人工知能学を活用した「内省と対話によって変容し続ける自己」のモデル化を議論することを目的に開催した。認知症当事者、AI研究者、医師、実務家を含め多様な視点から、「自己の変容と人間の多重意識」に関して活発な議論が行われ、「不安を手懐け

				る」という概念が醸成された。
--	--	--	--	----------------

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・ 人工知能時代の医療と医学教育「人工知能時代の到来で再認識される共感とコミュニケーションの能力」P.132-148 尾藤誠司
- ・ 「人工知能の臨床への導入によって、医師の役割はどう変わるか」論理的に思索する医療の問題 2018/1 株式会社 日本看護協会出版会 尾藤誠司
- ・ 臨床現場での取り組み「ともに考えるインフォームド・コンセント」について 患者安全～医療安全から患者安全へ～「治療」2017年99巻12月号 2017/12 尾藤誠司
- ・ 「うつより多い『不安』のみかた」医師の不安への処方箋「もう“ヒポクラテス“ではいられない！」 総合診療2017/9月号 医学書院 尾藤誠司
- ・ 終末期医療の倫理的課題 「病院」第76巻8号 2017/8 医学書院 尾藤誠司
- ・ 患者医療者関係、医療の文脈性、価値に基づいた医療について「日本プライマリ・ケア連合学会 基本診療ハンドブック第2版」 2017/6 株式会社 南山堂 尾藤誠司
- ・ 価値に基づく医療 (valure-based practice : VBP) と予防 「スーパー総合医 要望医学」 2017/6 株式会社中山書店 尾藤誠司
- ・ 医療の質を向上させる手段としての倫理コンサルテーションの将来展望 月刊「看護管理」2017/5月号 医学書院 尾藤誠司
- ・ コミュニケーションを処方する-ユマニチュードもオープンダイアログも入ってます! 理論編「患者に共感する」とは、どういうことか「総合診療」5月号 Page572-575 医学書院 2017/5 尾藤誠司
- ・ 日経メディカルオンライン 尾藤誠司
 - ・ 「インフルエンザには寛容の処方を」2018/2
 - ・ 「『暴力はダメ』という暴力」2017/12
 - ・ 「適応のある/なしは患者の知ったことではない」2017/11
 - ・ 「『患者への説明』に時間を充てすぎてはいけない」2017/8
 - ・ 「『患者は誤解している』と感じたとき」2017/7
 - ・ 「すべての患者にBest Supportive Careを」2017/5
 - ・ 「ACP (アドバンス・ケア・プランニング) を約束手形にしないほしい」2017/4
 - ・ 「尾藤、人工知能プロジェクトはじめました」 2017/1

(2) ウェブメディアの開設・運営:

オープンしているものはなし

(3) 学会以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・ NPO法人患者中心の医療をともに考えともに実践する協議会「患者と医療者の思いをつなぐシンポジウム」講演及びパネルディスカッションのパネラー 2018/3/10 東京都渋谷区 尾藤誠司
- ・ 第2回宮崎県総合診療フォーラムにおける講演「オール宮崎で総合診療医を要請するに

- は」～誰が中心でも内医療の形：プライマリ・ケアにおけるイノベーション～
2018/2/16 宮崎県宮崎市 尾藤誠司
- ・ 金沢赤十字病院医療安全研修会講演「日常臨床で遭遇する倫理ジレンマ：その考え方と意思決定支援」 2018/2/15 石川県金沢市 尾藤誠司
 - ・ 第37回日本看護科学学会各術集会 特別講演Ⅱ 「関係性と価値に基づく医療」
2017/12/16 宮城県仙台市 尾藤誠司
 - ・ 医療法人社団めぐみ会 医師分科会「接遇とは別視点での対患者コミュニケーション」
2017/11/25 東京都多摩市 尾藤誠司
 - ・ 南多摩保健所医療従事者担当研修会 講演「なぜ起こる？患者と医療専門職のすれ違い～患者のためのインフォームド・コンセントについて考える～」 2017/7/26 東京都多摩市 尾藤誠司
 - ・ 東京大学総合文化研究科PPP研究会講演 「関係性に基づく医療」とその実践
2017/7/8 東京都文京区 尾藤誠司
 - ・ 第38回日本病院薬剤師会近畿学術大会 教育講演2（医療倫理）「臨床における意思決定支援とインフォームド・コンセント」 2017/2/26 大阪府大阪市 尾藤誠司
 - ・ 価値に基づく診療（VBP）シンポジウム 講義「関係性に基づくケアに向けたコミュニケーション」 2017/2/12 東京都文京区 尾藤誠司
 - ・ 第13回 ヘルスリサーチワークショップ 基調講演及び全体討論「未来を変える～ネコ型ロボットと共生する時代へ～」 2017/1/28-29 東京都大田区 尾藤誠司
 - ・ （大学院での講義）東京大学大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学特別講義
2017/11/15および2017/12/20 東京都文京区 尾藤誠司
 - ・ （書評執筆）「一冊の本」最初の読者から（『身体知性 医師が見つけた身体と感情の深いつながり』書評欄） 2017/10 朝日新聞出版社 尾藤誠司
 - ・ （取材）日経BPムック「医学部進学ガイド2018」2017/10発行 テーマ：医療（および医師の役割）は現在どのように変わっているか、これからどう変わっていくと予想されるかを踏まえ、これから医学部を目指そうという若者はどのような心構えを持つべきか（これらにAIがどのように影響するのかの展望も含めて） 尾藤誠司
 - ・ （シンポジウムにおけるパネルディスカッションのパネラー）「人と情報のエコシステム」研究開発領域シンポジウム 人とAIが共進化する社会のデザイン-人文・社会化学の自然科学への関与 パネルディスカッション1：「AIは本当に人を幸せにするのか」
2017/3/14 東京都文京区 尾藤誠司
 - ・ （雑誌連載の取材）家庭画報 世界文化社「お医者様のトリセツ」 尾藤誠司
 - ・ 初診・医師に初めて会ったとき「『どうしましたか？』にどう答えるか」2018/3
 - ・ 急ぐべきか、急がざるべきか 「救急外来は、救命と応急処置のためにある」2018/2
 - ・ “入り口”を間違えない病院選び「遠くの大病院より近くのクリニック」2018/1

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (0 件)

●国内誌 (0 件)

●国際誌 (0 件)

(2) 査読なし (1 件)

石川翔吾, 竹林洋一: スーツケースワード, ゴール, 感情, 多重思考モデル—認知症情報学によるInterior Grounding —, 人工知能学会誌, Vol.33, No.3, pp.307-315 (2018).

6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演: 特になし

(2) 口頭発表 (国内会議 4 件、国際会議 0 件)

尾藤誠司 (東京医療センター), 「内省と対話により変容し成長し続ける自己のモデル」の構築と応用に向けて—プロジェクトの概要とこれまでの成果—, コモンセンス知識と情動研究会第9回研究会 (人工知能学会合同研究会2017), 慶応義塾大学 矢上キャンパス, 2017.11.25

石川翔吾, 竹林洋一 (静岡大学), 「こころのプログラミング」に基づく内省と対話のモデル化, コモンセンス知識と情動研究会第9回研究会 (人工知能学会合同研究会2017), 慶応義塾大学 矢上キャンパス, 2017.11.25

佐々木 勇輝, 柴田健一 (静岡大学), 認知症当事者の自己表現モデル, コモンセンス知識と情動研究会第9回研究会 (人工知能学会合同研究会2017), 慶応義塾大学 矢上キャンパス, 2017.11.25

石川翔吾 (静岡大学), 認知症情報学に基づく愛と健康の関係のモデル化, コモンセンス知識と情動研究会第10回研究会, 静岡大学 浜松キャンパス, 2018.01.25

(3) ポスター発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

6-5. 新聞報道・投稿、受賞等

特になし

6-6. 知財出願

特になし